

---

# SkyBlue

皇雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SkyBlue

### 【コード】

N2629H

### 【作者名】

皇雄

### 【あらすじ】

あるところに、靈感ゼロの三人組がいた。しかしそれも、ある事件に遇うまでの話だった。

## 第一話：始まり

ある街に、三人の男がいた。

三人の男は暇があると心靈スポット巡りをしていた。

特に靈感があるわけでもなく、いまだかつて幽霊と遭遇したことが無かった。

ある事件に巻き込まれるまでは……………。

梅雨も過ぎ、少し暖かくなってきたある日の午後。

昼食をとった後の授業とはなぜにもこんなにやる気が出ないものか？

教室を見渡すと何人かは夢の中のようなようだ。

寝てこそいないものの、真面目に授業に取り組む気にもなれず男は窓の外を眺めていた。

「おい高橋！黒板は外にはないぞ！」

不意に教師から罵声を浴びる。

寝ている奴らを差し置いて怒られたことに納得がいかず、高橋と呼

ばれたこの男はしかめっ面になった。

「じゃー夢の中にはあるんですかね？」

高橋は寝ている奴らをみわたしてやった。

高橋の返しにクラスはドツと笑いに溢れ、教師は

「確かにそうだな」と、寝ている奴らを起こし始めた。

高橋京介、中学二年生、趣味は心霊スポット巡り（ただしここ二・三ヶ月の話）。

授業も終わり、京介が帰る支度をしていると、二人の男が話し掛け  
てきた。

渡辺勝気、中学二年生、趣味、以下同文。

空羽皇騎、中学二年生、趣味、以下同文。

「いあゝ参った参ったあゝ、いきなり怒られるんだものゝ」  
勝気はどこからか椅子を持ってきて座り始めた。

「当たり前だ馬鹿たれ、授業はちゃんと聞けよ」

皇騎は勝気のおでこをつつついてやった。

「そーだそーだ」

「お前も先生に注意されてたたる？」

「そだっけ？」

そーだよ！と皇騎にほっぺをグリグリと指で突かれた。

皇騎は三人の中では突っ込み役で、今は普通だがその内ハリセン持  
つて

「なんでやねん！」とか言いださないか、京介は内心期待している。

なぜかって？優等生で通っている皇騎のキャラではないからだ。

「ところでさあ、今度の土日どっか行くっぜ、できればスポッ  
ト巡りが良い」

勝気は背もたれを抱き、足をバタバタさせ子供のようにはしゃいで  
いる。

「穴はこないだ行ったしなあ、京介どっかある？」

「思い切って樹海にいつてみる？」

「え？ダメだよ、樹海は夏休みにいくんだよ」

勝気はぶーぶーと顔を膨らませてみせた。

「っーか樹海は止めようぜ、帰ってこれなくなると困るし」

樹海とは自殺の名所で知られるあの樹海だ。

樹海に入った奴が行方不明になったという話も聞く、皇騎が止める  
のは、そういった話がただの噂ではなく、本当に起こっているから

だ。

「まあ確かに、かと言って地元のスポットはそんなに無いからなあ」

三人が話に詰まっていると、不意に声をかけられた。

「やあ、なんの話をしているの？」

いつのまにかその男は皇騎の後ろに立っていた。

「ん？」

「いや、土日の予定を立ててるんだよ」

「そうそう、どっか心霊スポットみたいな所ない？」

「心霊スポットかあ」と、男は暫らく考えている仕草をとると、

「あるよ、たぶん誰も知らないところが」

本当に？と勝気はまた足をバタバタさせ喜んだ。

「うん、山の頂上から行くんだけど、休憩所に道があって、さらに進むとまた休憩所があるんだ、そこをさらに進むと、廃屋があるらしいよ？」

「へえ、そんな所あったんだ？京介知ってた？」

「いや知らん、面白そうだな？行ってみようぜ」

「きつまり」

三人は行くところも決まり、準備はどうするか？時間はどうするか？と話に華を咲かせた。

「そつだ、お前もくるだろ？」

京介は、行く場所を提供してくれた男を誘おうと話し掛けたが。

「あれ？」

「え？」

「ん？」

いない、先程男が立っていた所には机があるだけだった。

「あれ？帰っちゃった？」

「つーかアイツ何組の奴？」

「知らないよ」

「俺も知らない」

一瞬場が静まり返った。

誰も知らない男、いきなり現われ、誰知れずと消えた男、普通ならここで気味が悪くなるところだが三人は違った。

「幽霊かな？」

「だったらなおさら面白そうだな！」

「よし！決まり！」

今だ幽霊の類に遭遇したことが無い三人は大いに喜んだ。

恐怖より好奇心、ただそれだけで彼らは動いていた。

翌日金曜日、皇騎と勝気は例の男を探したが、見当たらなかった。

「これは、もしかするともしかするかもな」

皇騎はニヤリと笑みをこぼした。

放課後、三人は今夜行われるイベントの最終確認を行っていた。

「じゃー確認するぞー、決行は今夜九時！ 山の駐車場に集合だ

！各自懐中電灯を持参してこいよ！」

「お〜〜！」

「おうー！」

三人の勢いは止まらなかった。

誰一人、正体不明の男を疑いもせず、幽霊なら大歓迎とはしゃいでいた。

今だ幽霊と遭遇していないという無念さと幽霊を見てみたいという思い、それと今まで怪我という怪我をしていないという安心感。

言葉を変えると調子に乗っていたのだ。

なにより、誰も知らない廃屋というのが彼らの興味をそさいでいた。

三人はそれぞれの思いを胸に解散した。

京介が駐輪場で自転車を出していると皇騎がやってきた。

「よう、どうした？」

「途中まで一緒に帰ろうぜ」

「おう！」

途中までと言っても京介の帰り道の途中に皇騎の家は在る。

京介は自転車を引きながら皇騎と肩を並べ帰路を歩く。

「そついえばさあ」

「ん〜？」

「今日、美波がしきりに俺の事心配してきたんだけどなんでかな？」

「美波が？」

美波とは皇騎の双子の妹のだが、彼女は無口無表情で友達と言える友達もおらず、家でも家族とはあまり口をきかないらしい。

その妹がしきりに兄のことを心配するのが珍しかった。

「今日、廃屋いくからじゃね？」

「いや、美波には言ってないんだよなあ今日の事」

「まあ無口の妹に心配されて嬉しいかぎりだろ」

「ある意味不気味なんだけどなあ」

ははっと笑う二人に、夕日が哀しげに沈んでいった。

## 第二話：始まり

21時05分、京介は焦っていた。

まさか時間を決めた本人が遅刻をするとは、思いもよらなんだ。

長い坂を登りきるとゴルフ場が見えてくる、ここまで来れば後少しだ。

ゴルフ場の脇を曲がると広い駐車場が見えてきた。

駐車場には、何台か車が停まっっていて他の人も何人が来ているようだった。

「遅いぞ〜」

勝気が懐中電灯を振り回し、自分等の居場所を教えてくれた。

「いや悪い、寝る気は無かったんだけどいつの間にか寝ちゃったみたいでさあ〜」

京介は両手を合わせ、拝むように弁解したが、

「時間決めた奴が、遅刻とか最悪だぞ！」

と、一蹴された。

「まあ事故とかじゃなくてよかったよ〜」

「勝気〜、心配してくれるのはお前だけだよ〜」

初夏の夜、涼しいとはいえ男二人が抱き合っているのは暑苦しい。

「気色悪いわ!」

皇騎はそこにある気色悪い男二人を蹴り飛ばした。

「あんだよ〜、妬いてるのか〜」

「ちがうわい!!!」

「早く行こうぜ!」

「遅刻した奴がいうな」

「遅刻した奴がいうな〜」

山には公園があり、山の中腹にある滑り台はジャンボ滑り台と  
言われちよっとした名物なのだ。

頂上に差し掛かると大木の形をした高台が見えてきた。

「結構な上り坂だよな……」

「まあ、山だからな……」

「疲れた〜」

「高台がこっちだから、休憩所はあっちだな」

皇騎が指差す方向に屋根付きのベンチが見える。

休憩所につくと、京介と勝気はベンチに座り込みジュースを飲み始めた。

「おー、道有るぞ道！道がつ、来いよ！！」

二人が渋々行くと、そこには暗闇に続く道が確かに有った。

「よし行くか……」

京介、勝気、皇騎の順で歩いていく、

ザッザッザッザッ。

歩き始めて五分くらいたっただろうか？

三人の会話は途切れ、ただ黙りながら暗闇を歩き続けた。

ザッザッザッザッ。

二十分くらい歩くと、さつきと同じ休憩所が現われた。

「おー、二個目の休憩所発見！」

「結構歩いたな」

「……………」

京介と勝気はベンチに座り再びジュースを飲み始めた。

「道、道、道、道なんか、探せよ!!」

京介は渋々道を探し始めた。

「道つ…………て、これか？」

京介が見つけた道は、道とは言えず草が生い茂っているのだが、ここに道があるといわんばかりにそこだけ木が開けていた。

「まあ、いかにもって感じだな……………」

「行けないこともないなあ」

「俺が草を倒しながら進むわ」

「わかった、棒かなんかないかな？」

皇騎が懐中電灯で辺りを照らすとスツと棒が現われた。

勝気が手ごろな棒を探しておいてくれたようだ。

「おお、ありがとう」

「うん」

京介は棒で草を分け、足で草を倒しながら歩いた。

ザッザッザッザッ。

道を下ったり登ったりすること約十分、懐中電灯の灯りは未だ道しか照らしてくれない、それにさっきから誰一人としてしゃべろうとしない。

「ちょい、喉乾いたわ」

京介が不意に止まると、後ろを歩いていた皇騎とぶつかった。

ザッザッ。

「あぶねーなあ」

「悪い悪い、ちょい休憩しよう」

「さっき休んだばかりか、………まだ十分しかたつてないぞ？」

「マジで？つーかどんだけ歩いたんだろ？すごい疲れたんだけど」

京介はジュースを取り出すと辺りを見渡した。

見渡すかぎり闇、闇、闇、そして草木が生い茂っているだけ、本当に廃屋なんかあるのか？

ここで初めて疑問に思い始める京介。

「大して歩いてないよ、勝気を見習え、今日に限っては全然文句を

言っていないだろ？なあ勝気」

ふと勝気を見ると、彼は放心状態ともいえる様な表情をし、汗をかいているようだった。

「勝気？どうした？」

「おい！勝気！？」

異変に気付いた京介は、勝気の肩を掴んで激しく揺らす。

「おい、京介！乱暴だぞ！」

「京……介……」

勝気の声に力が無い、と言うより何かに怯えているようだった。

「どうした？勝気？」

「あ……、あ……」

「どうした？」

「俺の後ろ……何かある？」

「後ろ？」

京介は懐中電灯で勝気の後ろを照らしてみたが、何もなく、草木が生い茂っているだけであった。

「何もなっ……」

何もない、そう口に出そうとしたが京介はもう一度勝気の後ろを照らした。

「最初の……休憩所から暫らく歩いてて気付いたんだけど……」

「ああ」

どうした？と皇騎も勝気の後ろを覗くと、

「え？」と驚くと言葉を失った。

「足音が……足音が一つ多くなって……」

「ああ……それで？」

「でっ……でっ……、二つ目の休憩所を出たとき、おっ、俺、一番後ろ、歩いてたじゃん？」

「そうだな……」

「あのなっ……、あのな……、やっぱり足音一つ多いんだよ！だつて！俺の後ろから聞こえるんだよ！ザッザッザッ！って！俺の後着いてくるんだよ！」

「そうか……、勝気、ちょっと後ろ見てみ？」

勝気はそのままゆっくり後ろを向いた。

「!?!?」

勝気も言葉を失った。

後ろには深い闇と生い茂った草木があるだけだ。

そう、草木が生い茂っているのだ、三人が歩いてきた跡が無いくらいに。

「おかしくね?」

「うっ…嘘だあ…」

「今俺達が歩いてきた道に木が生えてる……」

「いやいやいや!俺が倒してきた草の道もないじゃんか!」

状況が把握できなかった。

今自分達が歩いてきた道が無い、いや、道など最初から無かったのだが、京介が進むために草を倒して作った道が無いのだ。

おまけに二・三メートル後ろには木が生えている、いや、木が生えているのは当たり前なのだが、今自分達が歩いてきたであろうその場所には木が二・三本生えているのだ。

勿論その後ろの方もびっしりと……。

「それからなんだっけ?勝気……」

「足音……」

「……………戻ろう!!」

皇騎は二人の手を掴むと、元来たであろう道を歩き始めた。

すると京介は、

「ちよつと待てよ!」と皇騎の手を離した。

「なんだよ!まさかこんな状況になってもまだ先に進もうってんじゃないだろーな!?!?」

「ちっげーよ!!」

「じゃーなんだよ!?!」

「勝気が聞いた足音!……………何だと思っ?」

場に沈黙が走る、考えたくなかった。

あまり触れたくなかったから手を引っ張ってこの場を立ち去りたかったのに……………。

「しっ、知らないよ……………」

「もしかしたら……………」

京介は静かに二人を見た。

「もしかするかもしれない……………だから慎重にいこう!」

その男の眼は真つすぐで、二人には勇ましく見えた。普段ボーツとして頼りない男だが、いざとなると皆を引っ張ってくれる頼もしい奴なのだ。

三人はロープで体を縛り繋げた。

これで離れることはない、

「そうだ、合い言葉も決めとくか」

「合い言葉？」

「そう！まあ、もしものためよ」

「どんな合い言葉にする？」

「そつだな……………」

京介はニヤリと笑った。

引き返してから約10分、歩けど歩けど明かりは見えてこない、それどころかどんどん森の奥に進んでいる気がする。

不意に虫の鳴き声が止んだ。

「？」

「何だ？」

ザザザザッザッザッザッ

「!!!!!!」

何か三人の周りを徘徊している、足音は早くなったり遅くなったりと不規則な音を立てている。

「なっ、何かいるのか!？」

「はっ!走れー!」

京介の合図で三人は一斉に走りだした。

ザッザッザッザッザッザッ

足音は三人を追い掛けるようにそのスピードを早めていく。

京介、皇騎、勝気の順でロープに繋がれているのだが、皇騎は二人より足が遅く半ば引っ張られるように走った。

ただがむしゃらに走った。

どれだけ走っただろうか?足音は未だ三人を追跡してくる。

するといきなり開けた場所にでた。

「はあはあはあ……」

「はあはあはあ……」

「はあはあはあ……うっ、嘘だろ……？」

三人の前に現われたのは古ぼけた家だった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2629h/>

---

SkyBlue

2011年1月12日02時26分発行